



全国屈指の漫画コレクターは、NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト（熊本市、愛称「クママン」）の代表であり、公設民営の合志マンガミュージアム（熊本県合志市）の館長であり、崇城大芸術学部マンガ表現コースの非常勤講師として教壇に立つ。

1948年生まれの70歳。初めての著書で、戦後漫画史とともに歩んだ自身の半生を振り返りつつ、体験してきた「漫画の力」を伝えることを試みた。

熊本市の小学3年の頃から貸本屋に通い詰め、以来漫画のとりこになったという団塊の世代。「週刊少年サンデー」に連載された横山光輝の「伊賀の影丸」、白土三平の貸本漫画「忍者武芸帳 影丸伝」…。影響を受けた作品は数知れない。

そんな漫画少年にとって衝撃的な事件があった。高校受験を控えた中学3年のある日、創刊号から大事に集めていた週刊漫画雑誌を母親が無断で捨ててしまったのだ。「漫画を読むとはかになる」と言われた時代だった。

それから半世紀。今や漫画が教科書や大学入試問題に採り上げられても珍しくない。全国約40の大学や短大が漫画関連の講座を設け、漫画は立派な「教養」となった。

全国屈指の収集家が語る魅力

教養としてのマンガ

熊本高、熊本大法文学部から中央大大学院修士課程を経て熊本県職員に。28歳で退職し、国際機関の研究員として海外勤務を1年間経験。帰国後、家庭教師や塾・予備校の講師で生計を立てた。

一方で、趣味の漫画収集は熱を帯び、87年から30年近く絶版漫画専門店「キララ文庫」を経営。コレクションは10万冊を超え、2011年のNPO法人設立、17年の合志マンガミュージアム開館へとつながっていった。

漫画に傾ける愛情は並じやない。「熊本を日本一の漫画王国に」と将来構想を思い描く。ただ、専門的知識を持つ人材の育成など課題は少なくない。かつて隆盛を誇った少年漫画雑誌が売れなくなったことに関する分析や提言も盛り込み、ありったけの思いを本に書き込んだ。

「あと5年で私も後期高齢者。それまでにめどを付けたい。身の細る思いでね」。冗談めかし、体重94kgの大きなおなかを揺すって笑った。

（浜口雅也＝フリーライター）

（扶桑社新書・994円）

